

日本中東学会ニュースレター

JAMES
NEWSLETTER



No.171
2023/9/15

目 次

会長挨拶.....	2
理事会報告.....	4
総会報告.....	5
日本中東学会第39回年次大会報告.....	17
『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告.....	35
寄贈図書.....	37
会員の異動.....	37
連絡先をご存じないですか.....	38
事務局より.....	39

会長挨拶

保坂修司

このたび第20期日本中東学会の会長を拝命しました、日本エネルギー経済研究所中東研究センターの保坂修司です。今回、第19期に引きつづき、さらに2年間、会長をつとめることになりました。これは、おそらくこの2年間の私自身の会長としての働きが不十分であるから、もう2年間しっかりやれとの皆さまがたの叱咤激励ではないかと考えております。

第19期の2年間は新型コロナウイルス感染拡大によって立命館大学での年次大会が完全オンラインになったり、早稲田大学での年次大会でも公開講演会がオンラインになったり、レセプションが中止になるなど、さまざまなかたちで制限がありました。そして2023年度の筑波大学での年次大会は、ようやく、懇親会を含め、完全に対面での開催となりました。

同様に秋の公開講演会も2021年はオンラインでの開催でしたが、2022年度からハイブリッドでの開催となりました。そのほか、研究会やワークショップなども対面で行われることが増えてきていますし、中東を含む海外での調査・研究活動も徐々にコロナ前の状況に戻ってきているようです。

他方、コロナとは無関係ですが、中東研究文献データベースを含むウェブページの改修も進んでいます。実は、改修については私が担当理事のときにスタートしたのですが、私自身の怠慢もあり、思いのほか手間取ってしまい、後任の三沢元理事や秋葉現理事、利用者の皆さまにはご迷惑をおかけしてしまいました。この場をお借りしてお詫び申し上げます。いずれにせよ、過去2年間は、第19期理事の皆さん、とくに同僚でもある堀抜事務局長（特任理事）、そして事実上の副事務局長を担っていただいた渡邊駿会員の助けで何とか勤め上げることができました。あらためて感謝の意を表したいと思います。

さて、今年2023年は、日本と中東の関係史にとってきわめて重要な年です。筑波大学での年次大会公開講演会でも話題になりましたが、1973年は第4次中東戦争が勃発し、それに伴い、石油危機（オイルショック）が発生した年です。

アラブ産油国が石油価格を4倍にも上昇させ、さらに日本に石油が輸出されなくなるかもしれないということで、日本中が大パニックに陥りました。狂乱物価やトイレットペーパー買い占め騒ぎなどご記憶のかたも多いのではないのでしょうか。結局、それまで安価な中東の石油に支えられてきた日本経済は大打撃を受け、高度経済成長がストップしてしまいました。そこで痛感

させられたのが、私たち日本人がいかに中東、あるいはアラブ、あるいはイスラームについて知らなかったかことではなかったでしょうか。

実は、私の所属する中東研究センターはもともと石油危機直後の1974年に中東経済研究所として設立されました。この時期、そのほかいくつも中東関連のイベントが開かれたり、組織が設置されたり、現代の中東について知らなければならないという機運が盛り上がったといえます。ただ、喉元過ぎれば熱さ忘れる、の譬えどおり、状況が落ちつくと、中東のことなどすっかり忘れ去られてしまっていました。

その後も、中東では、1979年にはイランでイスラーム革命、サウジアラビアでマッカ占拠事件、さらにソ連軍のアフガニスタン侵攻、また1980年にはイラン・イラク戦争、1987年の第1次インティファダ、1990年には湾岸戦争、そして翌年の湾岸戦争、1993年のオスロ合意、2001年の9.11事件、そして2003年のイラク戦争、2010年末からのいわゆる「アラブの春」、今年になってからもトルコ南部大地震やスーダンにおける武力衝突というようにひっきりなしに大きな事件が発生しています。そのたびに中東やイスラームのことを理解する必要性が叫ばれるのですが、その掛け声も往々にして一過性で終わってしまいます。

また、地球温暖化や脱炭素の動きが加速するなか、石油を含む化石燃料への風当たりが強くなり、それに応じて石油や天然ガスを産業の柱とする中東諸国への関心が薄れているように感じます。しかし、ロシアのウクライナ侵攻で、世界的なエネルギー危機が起きると、それまで化石燃料に批判的だったヨーロッパ諸国を含め、あらためて中東への関心が高まっています。それにもかかわらず、日本の中東への関心は不十分であり、中東諸国における日本のプレゼンスも低下しています。その意味で、日本において中東研究者が果たさなければならない役割は今後ますます重要になってくるはずです。

国際関係論や地政学、経済学など現代に特化した研究だけではありません。歴史学や哲学、文学研究、文化人類学や考古学などの研究もこれまで以上に活発にしていく必要があります。それによって、日本の中東研究の裾野を広げていかねばなりません。来年度にはアジア中東学会連合（AFMA）の大会が日本で開催されます。日本中東学会は、今後も国内外でさまざまな学術交流の場を設けながら、皆さんの研究を発展させるために努力していく所存でございます。なにとぞ、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

理事会報告

【2023年度第1回理事会報告】

日時：2023年4月27日（木）18:30～22:00

形態：オンライン開催

出席者（五十音順・敬称略）：秋葉淳、五十嵐大介、岩崎えり奈、大川真由子、大塚修、小澤一郎、菊地達也、後藤絵美、佐藤健太郎、錦田愛子、福田義昭、保坂修司、堀抜功二、嶺崎寛子、森本一夫

欠席者（五十音順・敬称略）：熊倉和歌子（委任状あり）、山口昭彦（委任状あり）

[報告事項]

1. AJAMES 編集について報告と説明があった。
2. 広報事業について文献データベース改修に関する報告があった。
3. 第9回日本中東学会奨励賞の選考結果について報告があった。
4. 第39回年次大会の進捗状況について報告があった。
5. 第39回年次総会準備の進捗状況について報告があった。
6. 第40回年次大会開催校について報告があった。
7. 2024年度 AFMA 大会について報告があった。
8. 過去事務局資料の整理について報告があった。

[審議事項]

1. 2022年度事業報告・2022年度決算を承認した。
2. 2023年度事業計画・2023年度予算案を承認した。
3. JAMES 編纂事業計画を承認した。
4. 会員動向について、新規入会申込み、強制退会者、会費特例申請を承認した。
5. 監査の選出について承認した。
6. 育志賞推薦者について承認した。

【メール審議（2023年4月1日～2023年9月15日）】

1. 2023年4月5日 新規入会および会費特例の申し込みについて
4名から新規入会希望および1名からの会費特例申請があり、メールでの稟議の結果、4月12日に新規入会希望者4名の入会を承認、会費特例申請1件を却下とした。
2. 2023年7月13日 学会員名簿の研究目的での使用に関して
会員より、研究目的での会員情報の利用申請があり、メールでの審議の結

果、7月21日に利用申請を承認した。

3. 2023年8月7日 新規入会申し込みについて

5名から新規入会希望があり、メールでの稟議の結果、8月19日にこれを承認した。

(熊倉和歌子 ニュースレター・書記担当理事)

総会報告

【2023年度日本中東学会第39回年次大会総会議事録】

日時：2023年5月13日（土）16:00-17:00

会場：つくば国際会議場・オンライン（Zoom ウェビナー特設会場）併用

出席：当日出席者62名、委任状提出154名、計216名（会員総数648名に対する総会定足数5分の1（130名）を満たしたことにより、総会成立）

1. 開会宣言

2. 司会および総会役員の選出

渡邊祥子会員の司会により、議長として野元晋会員、書記として鈴木真吾会員、早川英明会員、議事録署名人として上野祥会員、徳永佳晃会員が選出された。

3. 2022年度事業報告および決算

下記の通り、2022年度事業報告、AJAMES編集委員会活動報告、2022年度決算報告、監査報告が行われ、質疑応答を経て全会一致で承認された。

3-1. 事業報告（報告：堀抜功二 第19期事務局長）

- 1) 第38回年次大会を2022年5月14日～15日に早稲田大学（ハイフレックス）において開催した。
 - 公開講演会「中東を越えて：中東の内／外で書く（アミン・マアルーフ氏との対話）」を開催
 - 研究発表7部会39本、企画セッション2本
- 2) 日本中東学会年報（AJAMES）38-1号（2022年7月）、第38-2号（23年3月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行った。また外国人編集委員の交代による審査・編集体制の強化、原稿執筆要領・内規・検討票の改訂、投稿規程の改訂などに取り組んだ。
 - 海外研究機関他、国内外寄贈先への発送を行った

- 科学技術振興機構（JST）運営の科学技術情報発信・流通総合システム（J-stage）においてバックナンバーの公開（第37巻2号まで）を行った
- 3) AJAMES バックナンバーの過剰在庫分の譲渡・廃棄作業を完了した。
- 4) 日本中東学会事務局過去資料の整理基準を整備した。また築地倉庫に保管されている過去の事務局関係資料の整理を完了した。
- 5) 第28回公開講演会「日本と中東—歴史的・文化的関係の再発見」を2022年11月26日にハイフレックス形式で開催した。
- 6) ニュースレター和文4回（総頁71頁）を発行した。第166号（5月2日、15頁）、第167号（7月31日、年次大会特集、30頁）、第168号（12月28日、13頁）、第169号（3月31日、13頁）。
- 7) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2022」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開した。
- 8) 学会ウェブサイト、学会公式ツイッター、および会員メーリングリストによる広報を行った。Vanta 社と学会ウェブサイトの運営管理および技術支援に関する契約を締結した。
- 9) 海外の関連学会との交流を促進した。
 - 第38回年次大会総会で韓国中東学会の Dr. Mijung Hong 会長よりご挨拶
- 10) OIC および日本国外務省の依頼により、OIC 主催「Connecting Further in the Post-Covid 19 Contemporary World: Enhancing Dialogue between the Islamic World and Other Great Civilizations」（10月10日、於ジェッダ）に、国際交流推進の観点から保坂修司会長を派遣した。理事会で協議し、派遣旅費等を「国際交流費」として支出した。
- 11) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図った。
- 12) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行った。
- 13) 第20期評議員・理事選挙を行った。
- 14) 会員の増減：入会27名、退会28名（うち除名16名）の異動があった。その結果、2023年3月31日現在の会員数は645名（正会員470名／うち海外在住12名；会費特例会員22名；学生会員153名／うち海外在住4名）となった。

3-2. AJAMES 編集委員会活動報告（報告：錦田愛子 副編集委員長）

- 1) 38-1号の編集・刊行（2022年8月刊行、9月発送）

- 投稿総数：16（うち日本語12、英語4）＋英語博論要旨3
- 掲載原稿：8—論文5（日本語）、博論要旨3（英語）
- 2) 38-2号の編集・刊行（2023年3月刊行・発送）
 - 投稿総数：8（うち日本語6、英語2）
 - 掲載原稿：3—論文3（日本語）
- 3) 日本中東学会奨励賞について
 - 2021～2022年中に発行された AJAMES 掲載の外国語論文等が選考対象
 - 選考委員会：大稔哲也前会長、黒木英充前々会長、錦田愛子 AJAMES 編集委員長
 - 選考規程細則に基づき、評議員から推薦作品を募集
 - 選考委員会はこれを受けて最終選考を行い受賞作品を決定
- 4) 科研費申請結果
 - 令和4（2022）年度科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化(B)）申請
 - 名称：「国際的な中東研究のプラットフォームとしての中東研究のリーディング・ジャーナルとしての『日本中東学会年報』のグローバルな展開の促進強化」
 - 令和9（2027年度まで）、金額260万円／年で応募したが、不採択の結果となった
- 5) その他
 - オープンアクセス：J-Stage によるバックナンバーの公開（37-2号まで公開済）
 - AJAMES ウェブサイトにて36-1号～38-2号の目次を公開中

3-3. 決算報告（報告：堀抜功二 第19期事務局長）

- 1) 総収入は28,365,632円、内訳は以下の通りであった。
 - 2021年からの繰越金が23,411,665円、年会費収入が4,635,000円、その他収入（AJAMES 販売代金などを含む）が318,967円
- 2) 総支出は28,365,632円。これによって総収入額と一致。内訳は以下の通りのものであった。
 - 事務局費は1,072,828円、事業費が5,038,128円、2022年度の繰越金が22,254,676円
- 3) その他、年次大会時託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金の収支について、下記の通り報告があった。
 - 年次大会時託児所特別基金の収支は、収入が1,171,059円（繰越金976,535円、本会計よりの繰り入れ50,000円、第38回年次大会余剰

金が144,516円)、支出が1,171,059円(2023年度への繰越金)で一致した

- 学会奨励賞特別基金の収支は、収入が1,703,812円(繰越金が1,703,797円、利子が15円)で、支出が1,703,812円(2023年度への繰越金)で一致した
 - 年次大会特別基金の収支は、収入が603,079円(繰越金が553,075円、本会計より繰り入れが50,000円、利子が4円)で、支出が603,079円(2023年度への繰越金603,079円)で一致した
- 4) また、総会の決議を経て学生会員、会費特例会員の2022年度会費の免除を行った。なお、2022年度会費をすでに納入した対象会員は、返金要求のあったものを除き2023年度会費へと振替えた。
- 5) 予算に比べ増減が著しい項目は以下の通りである。
- 事務局費「アルバイト謝金」の決算が0になっているのは、事務局でアルバイトを恒常的に雇用していないためである
 - 事務局費「資料保管費」で決算が予算よりも少ないのは、昨年度実績に基づいて予算策定を行ったところ、昨年度は築地倉庫の整理の費用が含まれていたのに対し、本年度は、築地倉庫の整理費用をAJAMES在庫整理費に計上しており、本費目での支出が小さくなったためである
 - 事業費「データベース改修費」の決算が0になっているのは、予定していた事業が計画通りに実施できず、支出が発生しなかったためである
 - 事業費「国際交流費」の決算が予算より多いのは、総会後にイスラーム協力機構(OIC)のセミナーへの派遣依頼を受け、保坂会長の派遣が行われたためである
 - 事業費「2021年度科研費残額返納」の金額が予算と決算で異なっているのは、口座利息が科研費の返納対象外であるにもかかわらず、誤って利息額を予算に組み入れていたためである
 - 事業費「AJAMES 在庫整理費」が予算よりも少ないのは、AJAMES バックナンバーの送付希望者数が想定より少なかったほか、在庫処分時の費用が想定より小さかったためである

3-4. 監査報告 (報告: 辻上奈美江 第19期監事)

2023年4月20日に、オンラインにて2022年度会計監査を行った結果、適正に処理されたことを確認した。

〈質疑応答〉

(質問1) 資料③における年次大会時託児所特別基金、年次大会特別基金のそれぞれの金額と、資料④におけるそれぞれの金額が逆転している。

(回答) ご指摘感謝する。

4. 第20期理事任務分掌の確認・監事選出

下記の通り、第20期理事任務分掌の確認が行われた。また、監事の選出について全会一致で承認された。

会長：保坂修司

事務局長：小澤一郎（特任）

総務：堀抜功二

ニューズレター・書記：熊倉和歌子

国際交流：岩崎えり奈（委員長）、佐藤健太郎、森本一夫

広報：秋葉淳

編集：福田義昭（編集長）、菊地達也、錦田愛子

渉外：後藤絵美

企画：五十嵐大介、嶺崎寛子

年次大会：大川真由子、大塚修

財務・会則：山口昭彦

監事：高尾賢一郎、鳥山純子

5. 学生会員および会費特例会員の2023年度会費の免除について（報告：保坂修司 第20期会長）

学生会員および会費特例措置の適用を受けている正会員に対する会費免除が下記の通り提案され、全会一致で承認された。また、本会費免除措置は原則として2023年度までとし、来年度は学生会員・会費特例会員からの会費徴収を再開することを基本方針とすると述べられた。

【提案内容】

対象：学生会員、および会費特例措置の適用を受けている正会員

①2023年度会費を一律免除する

②2023年度会費をすでに払った対象会員は、それを2024年度（以降）会費へ振り替える

6. 2023年度事業計画および予算

下記の通り、2023年度事業計画、AJAMES 編集委員会活動計画、予算案が報告され、質疑応答を経て全会一致で承認された。

6-1. 事業計画（報告：小澤一郎 第20期事務局長）

- 1) 第39回年次大会を2023年5月13日～14日に筑波大学（ハイフレックス）において開催する。年次大会に、韓国中東学会から Mijeong Hong 会長、Sanghyun Song 事務局長を招待する。
- 2) 日本中東学会年報（AJAMES）第39-1号（2023年8月）、第39-2号（2024年1月）の編集・出版と頒布、電子ジャーナルとしての公開の手配を行う。また外国人編集委員の交代による審査・編集体制の強化、原稿執筆要領・内規・検討票の改訂、投稿規程の改訂などに取り組む。
- 3) 第29回公開講演会を2023年11月頃にオンライン・ハイフレックス・対面（オンライン配信なし）のいずれかの形式で開催する。
- 4) 2024年に日本で開催予定の AFMA 大会に向けて準備を進める。
- 5) ニュースレターを年数回発行する。海外からのアクセス状況の把握や今後の情報発信の方針に関する協議を行いつつ、ニュースレター英語版の刊行について検討する。
- 6) 学会ウェブサイトの中東研究文献データベースの改修を行う。また、ウェブサイトの SSL サーバー証明書を取得する。
- 7) 「日本における中東・イスラーム研究文献データベース 1989-2023」につき、新規業績などの調査・更新を継続し、学会ウェブサイトにおいて公開する。
- 8) 学会ウェブサイト、学会公式ツイッター、および会員メーリングリストによる広報を行う。
- 9) 海外の関連学会との交流を促進する。
- 10) 地域研究学会連絡協議会の参加組織として相互交流に努め、地域研究の興隆を図る。
- 11) 日本学術会議協力学術研究団体として、他団体と連絡を取りつつ必要な活動を行う。

6-2. 2023年度 AJAMES 編集委員会活動計画（報告：福田義昭 第20期 AJAMES 編集委員長）

- 1) 39-1号の編集・刊行
 - 投稿総数：6（うち日本語3、英語2、アラビア語1）＋英語博論要旨1
 - 掲載原稿：3—論文1（英語）、研究ノート1（英語）、博論要旨1（英語）
 - 現在編集作業中、2023年8月発送予定
- 2) 39-2号の編集・刊行

- 6月1日に投稿締切、6月2日から審査作業、2024年1月刊行予定
- 3) 2023年度編集体制
 - 編集委員長：福田義昭（8） * 括弧内の数字は「今年度で～年目」を示す
 - 副編集委員長：錦田愛子（8）、菊地達也（3）
 - 編集委員：斎藤剛（8）、石黒大岳（7）、佐々木紳（7）、山崎和美（7）、吉岡明子（5）、吉村武典（5）、江崎智絵（3）、柏木健一（3）、今井宏平（2）、竹村和朗（1）
 - 外国人編集委員の任命について→外国人編集委員は交代の準備中（候補に打診中）
- 4) 令和6年度（2024年度）科研費（研究成果公開促進費・国際情報発信強化（B））への応募
- 5) その他
 - J-Stage でのバックナンバーの公開作業（38-1号以降） 投稿申請票の改訂、原稿執筆要領・投稿規程の改訂の総会での報告・公開

6-3. 日本中東学会2023年度予算報告（報告：小澤一郎 第20期事務局長）

- 1) 総収入は27,911,448円を予定し、内訳は以下の通りになる。
 - 2022年度からの繰越金22,254,676円、年会費収入5,406,700円（学生会員・会費特例会員からの会費徴収を再開する場合）、その他の収入（AJAMES 販売代金を含む）250,072円
 - その他の収入の科研費国際情報発信強化助成について、令和5年度は令和4年度に引き続き不採択となった
- 2) 総支出は27,911,448円。これによって総収入額と一致。内訳は以下の通りになる。
 - 事務局費1,800,000円、事業費6,455,000円、2024年度への繰越金19,656,448円
 - その他、年次大会託児所特別基金、学会奨励賞特別基金、年次大会特別基金について、それぞれ例年並みの予算を計上している
- 3) 前年予算に比べて大きな増減のある項目は下記の通りである。
 - 事務局費について、今年度は事務局移転の年に当たるため「事務局移転費」を計上した
 - 国内の会議のオンライン化が継続するものと考え、理事会開催に必要な会議費や交通費、編集委員会旅費などは引き続き削減した
 - 事業費「大会会場費」については、対面・Zoom ミーティング併用のハイフレックス形式で開催するため、対面会場の2日分の会場費として35万円を計上した

- 事業費「ウェブサイト改修費」について、ウェブサイトの SSL サーバー証明書を取得のための費用として40万円を計上した
- 事業費「国際交流費」について、今年度はコロナ禍の収束による国際交流活動の活発化が見込まれ、また2024年度に日本で開催予定の AFMA の準備も行われるため、大幅に増額し、40万円を計上した（うち KAMES 招聘費20万円、KAMES 派遣費10万円、AFMA 準備費10万円）
- 事業費「中東・イスラーム文献 DB 更新費」について、2022年度は支出の完了しなかった2021年度の費用を組み込んだ2年分の金額（30万円）となっていたが、2023年度は1年分の金額（15万円）となる
- 前年度に実施できなかった学会ホームページ「中東研究文献データベース」の改修費として、事業費「データベース改修費」に400,000円を再度計上する

〈質疑応答〉

（質問1）事業計画案（7）の1989-2021を1989-2023に訂正すべき。

（回答）ご指摘感謝。

（質問2）AJAMESの編集について。AJAMESが年々薄くなっているが、対策を講じるべきではないか。過去4年間でページ数が約3分の2になっている。総会資料を見ると、投稿数そのものが減少していることがわかる。査読の厳しさゆえに、投稿が減るといふ現象が起きているのではないか。次の締め切りまでにになにか対策を講じるべきである。中東学会の活動の2本の柱は年次大会と AJAMES であるが、500人近くの会員がいるなか、投稿数が一桁ということは、会員の重要な権利を行使していないことになる。学会誌に投稿し、いい査読を受けること、また AJAMES に掲載することで会員の間で話題になることが学会に所属していることの意味である。したがって、投稿数・掲載数が少ないことは学会活動への不信につながる。

以上の内容は、財政問題にもつながる。近年科研費がとれないことで、繰越金が年々現象し、相当大きな赤字予算を組んでいる。学会誌の論文掲載数が少ないと科研費に通らない。また、学会誌に投稿しないならば学会参加のインセンティブが失われ、会費が少なくなるのではないか。

これまで欧文特集を組むことで論文数や国際発信を維持していた部分もあるが、編集委員会として今後の対策方針はどうであるか。また、赤字予算を組んでいることについて、理事会の見通しは。

（回答）（錦田）投稿数の減少については、急に減ったので戸惑っている。

原因の一つは、コロナ禍で学会活動が低減していることがある。他の学会でも投稿数の減少が指摘されている。また若手研究者の減少や学会の会員数の減少もある。投稿数が減ったから会員数が減ったのではなく、会員数が減ったから投稿数が減ったと考えている。欧文特集に関しては、編集委員長から企画を組むように強制力をもって指示をするものではなく、企画の受付を行っている。しかし、欧文特集がなくなったことが欧文率や論文数の減少に繋がったことは確か。今後国際会議等が活発になっていくことが見込まれるので、パネル企画者などに声をかけるなど対応をしていく。

科研費の不採択については不徳の致すところ。原因の一つとして、編集委員会が単独で申請票を作成する体制になっているが、作成にあたり、編集委員会に直接権限のない既定の学会活動をベースに書かざるを得ないことがある。今後は AJAMES の編集と学会活動を連携させ、その内容を申請票に盛り込んでいくといった対応が必要である。また、もう一つに外国人編集委員が名目であったことで、厳しい審査になったとも考えられる。外国人編集委員の交代については順次進んでいく。

(福田) 投稿数・掲載数の減少が短期的なものか長期的なものか、まだわかっていない。査読の厳格化が長期的な減少を招いているかもしれないが、投稿数の推移、若手研究者の割合など、データの分析が必要である。その上で対策をたてるしかない。特集の呼びかけや、今後対面での学会開催が増えることから、現地での発表内容の投稿呼びかけ、英文投稿のサポート・アシストの充実などの対策が考えられる。

(小澤) 財政について、目減りしていることは事実。この件については、理事会で継続して議論する。理事会の議論では、内部留保が多いとの指摘もあり、そのままにしておくのはよくないという議論もあった。そのあたりのバランスも今後考えながら、今後理事会で検討をしていく。

(質問 2.5) 260万赤字予算を組んでいるが、会費免除分の85万ほどがそこに加わるという認識でよいか

(回答) ご指摘の通り。

7. 日本中東学会第9回奨励賞授賞式

第9回学会奨励賞について、保坂修司会長より概要の説明が行われた。

- 選考委員会（大稔哲也前会長、黒木英充前々会長、錦田愛子 AJAMES 編集委員長）において検討した結果、近藤洋平会員の下記の論文が学会奨励賞に選ばれた

Yohei Kondo, “Survival Strategies of Religious Minority Groups in Oman,” in Yohei Kondo (ed.), *Survival Strategies of Minorities in the Middle East: Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies* (Tokyo: ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies), 2021,

pp.123-141.

- 受賞者の近藤洋平会員には、賞状と副賞が保坂修司会長より贈呈された

8. 日本中東学会会長挨拶（保坂修司会長）

9. 議事終了・閉会宣言

議事会終了につき、司会の渡邊祥子会員から閉会が宣言された。

2022年度決算書

本会計

収入	22年度予算	22年度決算
2021年度よりの繰越金	23,411,665	23,411,665
年会費	5,040,250	4,635,000
正・学生会員	5,040,250	4,635,000
2019年度以前分	79,050	130,000
2020年度分	102,000	80,000
2021年度分	308,700	200,000
2022年度分	4,550,500	4,040,000
2023年度以降分	-	185,000
賛助会員	0	0
その他	250,079	318,967
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	0	0
利子	79	72
AJAMES販売代金	250,000	318,895
AJAMES掲載料	0	0
寄付	0	0
錯誤振込	0	0
雑収入	0	0
収入合計	28,701,994	28,365,632

(単位：円)

2023年度への繰越金内訳	22,254,676
郵便振替口座	13,696,966
三井住友銀行口座	8,511,199
現金	46,511

(単位：円)

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2021年度よりの繰越金	553,075	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	4	
第38回大会託児所運営費		0
2023年度への繰越金		603,079
合計	603,079	603,079

(単位：円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2021年度よりの繰越金 (片倉もとこ研究奨励基金 を含む)	1,703,797	
奨励金		0
振込手数料		0
利子	15	
2023年度への繰越金		1,703,812
合計	1,703,812	1,703,812

(単位：円)

支出	22年度予算	22年度決算
事務局費	1,750,000	1,072,828
アルバイト謝金	500,000	0
通信費	80,000	70,073
消耗品	50,000	1,648
会議費	0	0
交通費	0	0
振込手数料	20,000	10,890
事務局備品費	0	0
事務局移転費	0	0
事務外注費	900,000	877,241
資料保管費	200,000	107,976
会費返金	-	5,000
錯誤振込返金	-	0
事業費	6,175,133	5,038,128
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	0
AJAMES編集費	300,000	152,800
AJAMES欧文校閲費	150,000	88,883
AJAMES印刷製本費	1,950,000	1,709,510
編集委員会旅費	0	0
ウェブサイト改修費	0	0
データベース改修費	400,000	0
広報委員会事業費	900,000	817,820
国際発信強化旅費(海外招聘)	0	0
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	0
国際交流費	50,000	379,904
AJAMES国内発送費	300,000	253,057
AJAMES海外発送費	100,000	70,930
AJAMES在庫整理費	200,000	89,810
選挙費用	300,000	266,784
J-Stage公開費	200,000	162,404
公開講演会開催費	300,000	71,100
中東・イスラーム文献DB更新費	300,000	300,000
地域研究学会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学協会男女共同 参画推進連絡会	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
2021年度科研費残額返納	170,133	170,126
諸雑費	50,000	0
支出合計	7,925,133	6,110,956
繰越金	20,776,861	22,254,676
総計	28,701,994	28,365,632

(単位：円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2021年度よりの繰越金	976,535	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	8	
第38回年次大会剰余金	144,516	
第38回年次大会補填金		0
振込手数料		0
2023年度への繰越金	0	1,171,059
合計	1,171,059	1,171,059

(単位：円)

2023年度予算案
本会計

収入	22年度予算	23年度予算
2021年度よりの繰越金	23,411,665	
2022年度よりの繰越金		22,254,676
年会費	5,040,250	5,406,700
正・学生会員	5,040,250	5,406,700
2020年度以前分	181,050	213,600
2021年度分	308,700	135,000
2022年度分	4,550,500	136,400
2023年度分	-	4,921,700
賛助会員	0	0
その他	250,079	250,072
科研費公開講演会助成金	0	0
科研費国際情報発信強化助成	0	0
利子	79	72
AJAMES販売代金	250,000	250,000
AJAMES掲載料	0	0
寄付	0	0
収入合計	28,701,994	27,911,448

(単位:円)

(参考)各年度正・学生会員会費未納額／納入予定額および納付率

年度	未納額(円)/納入 予定額(円)	前年度(2022年 度) 納付率
2019年度以前分	100,000	84%
2020年度分	240,000	40%
2021年度分	300,000	39%
2022年度分	310,000	84%
2023年度分	5,530,000	
合計	6,480,000	

上の表の見方は以下の通り

未納額:本年度予算策定時点で在籍している会員の会費未納額

前年度納付率:予算策定年度の前年度決算(たとえば2023年度

予算であれば2022年度)における会費納付額÷

前年度予算に書かれている未納額×100

*2023年度予算に書かれている各年度(2020～2023年度)の年会費収入予算は、各年度分の会費未納額(上記)に、その前年度分会費の2022年度における納付率(=2022年度決算における会費納付額÷2022年度予算に書かれている未納額)に5を足した値の1/100を掛けることによって算出している

年次大会時託児所特別基金

費目	収入	支出
2022年度よりの繰越金	603,079	
本会計より繰り入れ	50,000	
利子	3	
第39回大会託児費用補助金		200,000
2024年度への繰越金		453,082
合計	653,082	653,082

(単位:円)

学会奨励賞特別基金

費目	収入	支出
2022年度よりの繰越金(片倉もとこ研究奨励基金を含む)	1,703,812	
利子	18	
奨励金(片倉基金より)		200,000
振込手数料		330
2024年度への繰越金		1,503,500
合計	1,703,830	1,703,830

(単位:円)

支出	22年度予算	23年度予算
事務局費	1,750,000	1,800,000
アルバイト謝金	500,000	500,000
通信費	80,000	80,000
消耗品費	50,000	50,000
会議費	0	0
交通費	0	0
振込手数料	20,000	20,000
事務局備品費	0	0
事務局移転費	0	50,000
事務外注費	900,000	900,000
資料保管費	200,000	200,000
事業費	6,175,133	6,455,000
大会開催費	400,000	400,000
大会会場費	0	350,000
AJAMES編集費	300,000	300,000
同欧文校閱費	150,000	150,000
同印刷製本費	1,950,000	1,950,000
編集委員会旅費	0	0
ウェブサイト改修費	0	400,000
データベース改修費	400,000	400,000
広報委員会事業費	900,000	900,000
国際発信強化旅費(海外招聘)	0	0
国際発信強化旅費(海外派遣)	0	0
国際交流費	50,000	400,000
AJAMES国内発送費	300,000	300,000
AJAMES海外発送費	100,000	100,000
選挙費用	300,000	0
J-Stage公開費	200,000	200,000
公開講演会開催費	300,000	300,000
中東・イスラーム文献DB更新費	300,000	150,000
地域研究会学会連絡協議会分担金	0	0
人文社会科学系学会協会男女共同参画推進連絡会分担金	5,000	5,000
年次大会特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
託児所特別基金への繰り入れ	50,000	50,000
前年度科研費残額返納	170,133	0
諸雑費	50,000	50,000
支出合計	7,925,133	8,255,000
2023年度への繰越金	20,776,861	
2024年度への繰越金		19,656,448
総計	28,701,994	27,911,448

(単位:円)

年次大会特別基金

費目	収入	支出
2023年度よりの繰越金	1,171,059	
本会計よりの繰り入れ	50,000	
利子	8	
第39回年次大会補填金		
2024年度への繰越金		1,221,067
合計	1,221,067	1,221,067

(単位:円)

(小澤一郎 事務局長)

日本中東学会第39回年次大会報告

【プログラム】

第1日目：2023年5月13日（土）

会場：つくば国際会議場

公開講演会（ハイフレックス方式）

「不確実な時代における中東研究の可能性：化石燃料、食薬資源、再生可能エネルギーの観点から」

講演者：近藤重人（日本エネルギー経済研究所）

「中東・日本関係の過去と将来：エネルギー安全保障と気候変動の視点から」

講演者：礒田博子（筑波大学）

「北アフリカ食薬成分機能性解析の文理融合研究による新展開」

講演者：岡島敬一（筑波大学）

「再生可能エネルギー由来水素製造とサプライチェーン：中東への期待」

討論者：塩尻和子（筑波大学、アラブ調査室）、長沢栄治（東京大学）

閉会挨拶：保坂修司（日本エネルギー経済研究所／日本中東学会会長）

日本中東学会総会（ハイフレックス方式）

懇親会

第2日目：2023年5月14日（日）

会場：筑波大学筑波キャンパス春日エリア教室

企画セッション（1セッション、対面方式）

個人研究発表（7部会、対面方式）

【企画セッション】

「ポスト2003イラクにおけるアート、ワタン／ホームランド、抵抗」

司会：岡真理（早稲田大学）

発表者：

相澤恭行（文化芸術団体 ChalChal）「アートの視点から：ワタンの再創造へ」

岡真理（早稲田大学）「文学の視点から」

酒井啓子（千葉大学）「路上の抵抗から」

コメンテーター：李英哲（朝鮮大学校）

【個人研究発表】

第一部会

司会：澤井一彰（関西大学）

秋葉淳（東京大学）「オスマン帝国シャリーア法廷の役割の再検討：
1840年代の法廷収入簿より」

篠田知暁（東京外国語大学）「この世で最も不幸な人々：16世紀モロッ
コの改宗者たち」

伊藤匠平（東京大学 J）「サロニカ社会主義労働者連盟の活動からみる
オスマン末期の社会主義者と労働者」

早矢仕悠太（東京大学 J）「中世マーリク派法学における相隣権概念の
再検討」

司会：吉村武典（大東文化大学）

大河原知樹（東北大学）「家族の歴史を復元する：ダマスカスの事例」

松原康介（筑波大学）「古代都市の再構築：ダマスクス1968年マスター
プランの研究」

中鉢夏輝（京都大学 J）「インドネシアにおけるエコ・モスクの成立背
景：水・環境倫理・イスラーム法の観点から」

Aqil Cheddadi (Keio University) “Defending the Right to the City: Community
Activism and Resistance of Moroccan Bidonville Dwellers to Forced
Relocation”

第二部会

司会：錦田愛子（慶應義塾大学）

大坪玲子（東京外国語大学）「韓国で働くイエメン難民」

鈴木慶孝（日本学術振興会特別研究員）「トルコのシティズンシップ：
移民・難民・マイノリティの包摂を焦点として」

クレシ・サラ好美（慶應義塾大学 J）「日本に暮らすムスリム第二世代：
学校教育現場における実態の検証」

司会：堀井聡江（桜美林大学）

小島宏（早稲田大学）「コロナ禍の英国におけるムスリム若者における
インターネット利用と宗教関連行動」

ハシャン・アンマール（立命館大学）「現代ワクフ（寄進財産）研究と
イスラーム・フィンテックの新段階へ向けて：課題と展望」

桐原翠（立命館アジア・日本研究機構）「国際的なハラール産業の拡大
の新動向：マレーシアのイスラーム経済政策との相関から」

佐藤馨大（秋田大学 J）「イランにおける新型コロナウイルスの感染状

況と大気汚染の関係」

第三部会

司会：黒木英充（東京外国語大学）

岡崎弘樹（亜細亜大学）「シリア・ムスリム同胞団員のバルミラ監獄手記を読む」

浪内紫雲（東京外国語大学 J）「シリアにおける市民社会と政権との関係：シリア開発信託を事例として」

So Yeon Ahn (Dankook University) “A Study on the Changes and Challenges Facing Islamic Parties after the Arab Spring: The Transformation of Tunisian and Moroccan Islamic Parties from Marginalized Political Parties to Established Political Parties”

Mostafa Khalili (Kyoto University) “The Protest Movement in Iran from the Lens of Peripheries: The Perception of the “Woman, Life, Freedom” Movement Among Ethnic Minorities”

司会：岡崎弘樹（亜細亜大学）

吉田智聡（防衛省防衛研究所）「反乱軍から擬似的国家治安機関への道程：フーシー派の国民軍プロパガンダに関する一考察」

岡野内正（法政大学）「男を殺せ！：アブドゥッラー・オジャランの武装ジェンダー革命論」

山岡陽輝（慶應義塾大学 J）「現代におけるイスラーム国家の構想：解放党の『カリフ制国家』構想を事例として」

第四部会

司会：鈴木啓之（東京大学）

山本健介（静岡県立大学）「コロナ禍初期の東エルサレム：『生の序列化』とパレスチナ人の危機対応」

江崎智絵（防衛大学校）「ガザ指導部を中心とするハマースの対外政策：ハニーヤ政治局長の1期目（2017～2021年）を事例として」

司会：濱中新吾（龍谷大学）

岡部友樹（大阪経済法科大学）「レバノン内戦における宗派と暴力：集団内暴力と集団間での紛争に着目して」

児玉恵美（東京外国語大学 J）「レバノン内戦期における強制移動：レバノン人キリスト教徒の故郷をめぐる記憶から」

李乗漢（神戸大学 J）「イスラエルにおける核兵器開発及び保有政策の不透明性：ディモナ原子炉をめぐる1960年代の国内政治過程とソ連の軍事的脅威」

中村友紀（筑波大学 J）「占領影響下のヨルダン川西岸地区における農業普及がパレスチナ人農家の技術の採用に及ぼす効果の定量的分析」

第五部会

司会：岡野内正（法政大学）

近藤文哉（上智大学）「現代エジプトの預言者・聖者生誕祭における国家の管理・統制および市民の祝祭経験に関する一考察」

山口匠（東洋大学）「現代モロッコにおける権威主義体制の動態：パンデミック後のマフザン体制を問う」

村上拓哉（中東戦略研究所）「王朝君主制の終焉？：湾岸諸国における君主・皇太子への権力集中の趨勢」

米田優作（立命館大学 J）「現代エジプト権威主義体制下におけるサラーフィー主義者の政治姿勢：ヌール党関係者の著作分析から」

司会：渡邊駿（日本エネルギー経済研究所）

白谷望（愛知県立大学）「2021年モロッコ国民議会選挙におけるイスラーム主義政党の惨敗と王党派政党の躍進」

青木健太（中東調査会）「イランの対外政策と非国家主体：アフガニスタン人の動員を事例に」

中村覚（神戸大学）「ムハンマド・ビン・アブドゥルワッハブはなぜムスリムと戦ったのか」

第六部会

司会：柳谷あゆみ（公益財団法人東洋文庫）

竹田敏之（立命館大学）「アラビア語研究の新分野としての文法源学（Usul al-Nahw）」

榮谷温子（慶應義塾大学）「総称指示との関係から見たアラビア語の『一般化（タアミーム）』」

村上武則（東京外国語大学）「クルド語翻訳と古典の『クルド化』」

司会：菊地達也（東京大学）

濱田聖子（東京大学）「ジャーヒズ作品における『真面目さと冗談』の手法」

ウェルズ桜（立命館大学 J）「リファア・タフターウィーによる文化間対話の試みと意図：『バリ要約のための黄金の精錬』を中心に」

第七部会

司会：後藤絵美（東京外国語大学）

黒田賢治（国立民族学博物館）「1907年マッカの旅？：中島裁之の世界旅行と国際親善」

ヘバタッラー・オマル（名古屋大学）「エジプトと日本のお互いのジェンダー表象」

Nicholas Mangialardi (Williams College) “Japan in Egyptian Popular Culture”
Alaa Elsharqawy (Cairo University J) “Japan and Suez Crisis”

【公開講演会報告】

日本中東学会第39回年次大会の公開講演会は、「不確実な時代における中東研究の可能性：化石燃料、食薬資源、再生可能エネルギーの観点から」と題して、近藤重人・日本エネルギー経済研究所主任研究員、礒田博子・筑波大学生命環境系教授、岡島敬一・筑波大学システム情報系教授による講演が行われた。近藤会員の講演では、石油資源を通じた日本と中東の関係が各時代の歴史的文脈とともに振り返られ、礒田教授の講演では主に北アフリカ地域の食薬資源の開発に関する取り組みが紹介され、また岡島教授の講演では、アラブ首長国連邦で展開されている太陽光・太陽熱発電の最新状況が紹介された。これらの報告内容は中東学会ではあまり聞くことのできないものであり、貴重な機会となった。

コメンテーターの塩尻和子・筑波大学名誉教授からは、日本の石油外交と中東との関係を歴史的に振り返りつつ、脱炭素の潮流が原子力発電開発に伴う諸問題について指摘がなされた。同じくコメンテーターの長沢栄治・東京大学名誉教授からは、ティモシー・ミッチェルの Carbon Democracy を参照しつつ、石油は産油国だけでなく、その消費国においても民衆の政治参加の形を変える力を持つことに注目する必要性と、エネルギー移行の時代における日本と中東、そして世界的な民主主義の将来という課題が指摘された。

講演者からは日本と中東の将来に対する明るい展望が示されたが、コメンテーターからはこのテーマに対する警句が提示されたのが対照的であった。

（松尾昌樹 大会実行委員）

【研究発表会場から】

企画セッション：「ポスト2003イラクにおけるアート、ワタン／ホームランド、抵抗」

米国のイラク侵攻から20年を機に、本セッションは、もっぱら国際政治の観点から言説化されることの多いイラクに、現代アートや文学、グラフィ

ティといった「アート」を通して新たな光を当て、論じることを目的として企画された。

岡（早稲田大学）による趣旨説明のあと、酒井啓子会員（千葉大学）が、2003年以降のイラクの政治的な流れを解説。続いて、アラブ音楽や美術を通してイラクと日本の文化交流活動をおこなう相澤恭行会員（文化芸術団体ChalChal）が、この間のイラクの現代アーティストとその作品、そして3月に再訪した現地の最新のアート・シーンを紹介。米軍の攻撃で破損した稀覯本をアート作品に甦らせたカーセム・サブティによる抵抗のアートや、戦乱の故国を離れ異邦でイラクの記憶を作品に描くハーニー・デッラ・アリーにおけるワタンについて論じた。

岡は、活況を呈するイラクの文学について報告。旧政権下では語りえなかったイラン・イラク戦争や湾岸戦争の実態をはじめ、イラク戦争と占領、続く内戦等をテーマに、この十数年間に600冊以上もの小説が国内外のイラク人作家によって刊行され、これらで描かれるイラク人の生はG・アガンベンの言う「ホモ・サケル」「剥き出しの生」であるとするI・マスムーディーの議論を紹介し、とりわけブッカ収容所体験を描いたS・ヌーリーの『ブッカの狂人たち』は「監獄文学」を越える「強制収容所文学」ではないかと提起した。

酒井会員はまず、岡が紹介した作家たちの生地に孕まれた政治的意味について解説したのち、2019年に若者たちが都市中心部を占拠して、元亡命政治家が支配層につく戦後体制に抗議した「10月革命」について論じた。「ワタンを取り戻す」という革命のスローガンが端的に示すように、同革命が、外国によってではなく自国政府に奪われたワタンを自らの手に取り戻そうとするものであることを、収集した種々の壁アートやデモ隊のスローガンの分析を通して考察した。

3本の報告のあと、李英哲氏（朝鮮大学校／日本文学）がコメントした。今年が関東大震災から100年目であり、同震災における朝鮮人はまさしく「ホモ・サケル」「剥き出しの生」であったという指摘にはじまり、日本と在日朝鮮人をめぐる歴史的、今日状況に関し種々の論点を指摘し、あるべき未来のワタンを展望する上でアートや文学は積極的な役割を果たしうると結んだ。

90分では到底消化しえない盛りだくさんの内容で、多くの来場者があったにもかかわらず、フロアとの質疑応答の時間がとれなかったことが惜しまれるが、これを契機に今後も、「アート」や「文学」という観点から、さまざまな中東研究がなされることを期待してやまない。

ランチをとらずにセッションに参加して下さった会員の皆さんと、セッション開催の運営にあたってくださった実行委員会の皆さんに、この場を借

りて御礼申し上げたい。

(岡真理)

第一部会

第一部会の午前中は、4名の研究発表が行われた。最初の報告は、秋葉淳会員（東京大学）による「オスマン帝国シャリーア法廷の役割の再検討：1840年代の法廷収入簿より」であった。この発表では、19世紀中頃のブルガリアのヴィディンとギリシアのイェニシェヒル（現ラリッサ）の各法廷の収入簿を分析しつつ、そこに見られる様々な問題があきらかにされた。とりわけ、法廷の収入には金銭貸借にかかわる取り立て手数料が多いこと、ムスリムのみならず非ムスリムもが積極的にシャリーア法廷を利用していたこと、さらには上述の手数料が回収される負債総額の10%と比較的低率であったことから少額の負債にかかわる事例が多いという興味深い特徴が示された。

続く報告は、篠田知暁会員（東京外国語大学）による「この世で最も不幸な人々：16世紀モロッコの改宗者たち」と題されたものであった。サアド朝のアフマド・マンスールによるオスマン朝のデヴシルメ制度をモデルとした軍制改革と、それにともなって増加したと考えられる元キリスト教徒改宗者にかかわる様々な問題について、とりわけ1585年の殉教事件に光をあてつつポルトガル史料から検討がなされた。発表後の質疑応答では、用いられた史料の性格に起因するバイアスが指摘された他、同時期のオスマン朝における類似の事例との比較研究の可能性を示唆するコメントも出された。

3番目の報告は、伊藤匠平会員（東京大学）による「サロニカ社会主義労働者連盟の活動からみるオスマン末期の社会主義者と労働者」であった。20世紀初頭に大きな社会変容を経験したとされるギリシアのセラーニキ（現テサロニキ）において、結成されたばかりのサロニカ社会主義労働者連盟の活動の変化について、その舞台となった場に注目しつつ具体的にあきらかにすることが試みられた。すなわち、サロニカ社会主義労働者連盟の構成員たちは、従来からの活動の場をホテルに併置された西洋式のコーヒーハウス（カフェ）などに移しつつ、文化・教育活動を積極的に展開していった状況が明示された。

午前中最後の報告は、早矢仕悠太会員（東京大学）による「中世マーリク派法学における相隣権概念の再検討」であった。本発表では、イスラーム法学における相隣関係について、とくにマーリク派法学における諸問題について考察がなされた。利益を最大化することを目的とするために、時として個人的な所有権を制限しているかのように見受けられるマーリク派法学の特徴を踏まえた上で、とくに都市外部に存在する公共用地や水路あるいは井戸と

いった具体的な事例を取り上げつつ、それらを取りまく相隣権の問題について法解釈上の再検討が加えられた。

(澤井一彰)

大河原知樹会員（東北大学）の報告では、これまで報告者が行ってきたシリアの現地調査と文献調査を基に、ダマスカス旧市街南西部、シャージェル地区の街区長ハッダーム・スルージー家の来歴を、報告者の長年にわたる聞き取りと文書史料から再構築する試みが紹介された。18～19世紀にかけて同家の祖先のハウワーム家がダマスカスの様々な利権の獲得し、ワクフ化していくプロセスや、スルージー廟の管理権をめぐる訴訟などの具体的な案件から精緻な家族史を提示した。

松原康介会員（筑波大学）の報告は、ダマスカス旧市街における自動車などによる交通事情への対応として行われた、1968年にフランスのミシェル・エコシャールと日本の番匠谷堯二によって主導的に策定された都市計画の内容について検討した。特に番匠谷の経歴やその計画手法を中心に、1968年都市計画のヘレニズム時代のプランを基とした「古代都市の再構築」を企図した計画に対する諸批判や、報告者による近年の調査によるダマスカスの都市計画の現在の進行状況等が示された。

中鉢夏輝会員（京都大学）の報告は、インドネシアにおける環境に配慮したエコ・モスクがつくられる背景として、近年の地球環境問題とそれに対するイスラーム法の新しい解釈の展開と実践事例等が紹介された。特にインドネシアの経済発展にともなう現実問題として環境汚染とイスラーム法の対応や、実践としてのモスクにおける浄化処理後の水の再利用を合法とするウラマーの判断などの調査報告が行われた。

シャッターディ・アキル会員（慶應義塾大学）の報告は、モロッコの首都ラバトの一区画、ビドンビル（スラム）であるドゥワール・エル・ガラアを対象に行った2018、2019年の調査を基として、そこに居住する人々が形成する自治的空間と政府によるスラム・クリアランス政策に基づく強権的な強制立退きや移住政策に対する抵抗や対応、政治運動などが示された。

(吉村武典)

第二部会

大坪玲子会員（東京外国語大学）の発表は、「アラブの春」を機に始まった内戦を受けて2018年などに韓国の済州島に逃れたイエメン難民について、その移動と就労の状況や制度的背景の解明を試みたものである。済州島で2022年から23年にかけて行った当事者への聞き取り調査に基づき、彼らの就く業種や収入、保有するビザの種類、将来への希望などさまざまな側面の特

徴が示された。また韓国側の受け入れ状況についても、制度的な変遷とその意図が指摘された。そこからは、安価な労働力の輸入と人権先進国としての地位を求める韓国と、高収入と安定を求めて移動し試行錯誤するイエメン難民の相互関係が描出された。

鈴木慶孝会員（日本学術振興会特別研究員）の発表は、トルコのシティズンシップの特徴と、その中でのシリア難民の位置づけについて解析する内容であった。トルコで難民とはヨーロッパ国籍の保有者を指し、シリア人は含まれない。国民の間での多様な出自や背景の存在を否認するトルコにおいて、シリア人はマイノリティとなることもできず、長期滞在しても国籍を取得することもできない。こうしたトルコのシティズンシップ制度の下では、シリア人は一時的庇護により最低限の権利を得ているものの不平等な地位にとどまらざるを得ず、多様性包摂のためには制度の改善が必要であることが指摘された。

クレシ・サラ好美会員（慶應義塾大学）の発表は、日本で学校教育を受けるムスリム第二世代に着目し、聞き取り調査とアンケート調査に基づき、彼らが経験したいじめや偏見の実態を明らかにしたものである。そこでは食の禁忌や生活習慣の違いに対して、無理解にもとづく差別が第二世代の子どもを苦しめていることが具体的に提示された。また学校教育の場で教員が個人に向き合い必要な配慮をし、多様性の理解を促すことで、差別を減らし共生を実現する一助となり得る例も示された。社会的に重要性の高いテーマを着実に検証方法で明らかにした、意義深い研究報告であった。

（錦田愛子）

小島宏会員（早稲田大学）は、コロナ禍で海外調査が不可能であった2021年11月に日本の調査会社を通じて英国で行ったウェブ調査の分析に基づき、18-39歳のムスリム男女における各種インターネット利用と宗教関連行動の影響関係を論じた。暫定的な結論として、宗教目的のインターネット利用や友人・知人間の少人数のネットワークが宗教関連行動に大きな影響を与えているが、様々な項目における男女間の差異が存在することも明らかになった。報告後は調査の目的・手法の詳細に関する質疑応答がなされた。

ハシャン・アンマール会員（立命館大学）は、今日のイスラーム金融におけるワクフの革新とイスラーム・フィンテック（金融技術）に関して、東南アジア（マレーシア）と中東（クウェート）を比較考察した。時間的な制約のため本論は概略が示されるにとどまったが、ワクフ制度の現代的活用における特にマレーシアの先導的な役割が明らかになった。クウェートを比較対象とした理由やイスラーム金融の展望について質疑応答がなされた。

桐原翠会員（立命館アジア・日本研究機構）は、ハラール産業とマレー

シアの経済政策の関連性についてその歴史的展開をふまえつつ、特に2020年代から同国が掲げる「ハラール経済」を中心に考察した。国際的にハラール産業を牽引してきた同国がコロナ禍を逆手にとって新たなハラール需要を開拓し、経済全体の成長を目指していることが示された。その背景にあるマレーシアの国内事情や政策の意義について質疑応答がなされた。

佐藤馨大会員（秋田大学）は、イランにおける新型コロナウイルスの感染状況と大気汚染の関連性の考察を試みた。イランの4都市におけるコロナ禍前後約6年間の大気汚染濃度の推移とコロナ禍での感染状況と大気汚染濃度の比較から、全体的には大気汚染はコロナ禍前より悪化しているという結論が導かれた。これに対してデータや調査方法の問題点や研究の学術的意義が議論された。

（堀井聡江）

第三部会

岡崎弘樹会員（亜細亜大学）の報告は、シリアの最も過酷な政治犯拷問施設から生還したムハンマド・バッロによる手記『ギロチン台からの生還者』（2021年）を紹介し、そのイスラーム主義者としての思想的な位置づけを行うとともに、ナチ収容所からの生還者による手記と比較することで、ジェノサイド的状况に抵抗し生き抜く人間の意志を、普遍的なレベルで論じる視座を提供するものであった。質疑においては、極限状況において人を救うのは、神であるとするイスラーム主義的な見方と、自らの努力とする近代主義的な見方との両方があることや、刑務所の中と外のイスラーム主義者たちの関係などが議論された。

浪内紫雲会員（東京外国語大学）の報告は、NGO 慈善団体「シリア開発信託」の成立過程と組織概要を明らかにしたうえで、2023年2月に発生した大地震災害への具体的な対応について論じ、市民社会と政権の間で親和的關係をつくりだす媒介的存在と位置付けた。質疑では「市民社会」のアラビア語訳2種類（mujtama‘ madani/mujtama‘ ahli）の政治的意味合いの違いや、情報収集の容易でない環境における NGO 組織に関する情報収集の仕方について議論・助言がなされた。

韓国中東学会の So Yeon Ahn 氏（Dankook University）の報告は、いわゆる「アラブの春」後の、チュニジアとモロッコにおけるイスラーム主義政党（それぞれナフダ党、公正発展党）の勢力伸長と後退について、権威主義体制へのオルタナティブ、イデオロギー的穏健化、アイデンティティ・ジレンマといった観点から分析し、政党の後退が政治的イスラームの後退とは見なせない結論付けた。政党の得票数と選挙全体の投票率との関連、イスラーム主義政党が後退した段階でのオルタナティブについて質疑があった。

カリリ・モスタファ会員（京都大学）の報告は、2022年9月からイランにて高まりを見せた“Women, Life, Freedom”運動について、その非統一組織的、ボトムアップ的性格や明確なオルタナティブを示さない傾向を指摘したうえで、アゼリー人とクルド人15人ずつへのインタビューと様々な媒体の人類学的言説分析を基に、同運動において女性が中心的役割を果たしていることや、エスニック・階級的枠組みを超えた体制批判がイランの政治システムを急激に変えるのではないものの、「マルチ・エスニック国家」の安定性を揺るがす潜在力を持つと指摘した。質疑では、他のエスニック集団（バローチー）や世代間の違い、在外イラン人の影響力について議論がなされた。

（黒木英充）

吉田智聡会員（防衛省防衛研究所）は、イエメン北部を実効支配するフーシー派が、2015年に本格的に政権運営を始めて以来、従来の反乱組織から国家性の獲得を目指すナショナリスト的な性格を強めたプロセスについて分析した。とりわけ同派が治安機関を吸収し、多元主義を軸とした人事刷新を行う一方で、自派の犠牲者性を強調するプロパガンダを行っている点に焦点を当てた。質疑応答では、特に「ザイナビヤート」という同派の女性要員が動員されていることの意味などについて活発な議論が行われた。

岡野内正会員（法政大学）は、クルド労働者党（PKK）指導者オジャランの武装ジェンダー革命をめぐり、社会契約論と18世紀欧米女性が置かれた実態との矛盾（ウルストンクラフトのジレンマ）を関連付けて論じた。そのうえで、2012年以降のシリア北東部のクルド自治区ではオジャランの指針の下で女性の警察参加や財産の共同管理、公職への就任が実現し、かつての矛盾が解消されていると強調した。質疑応答では、関連する欧米語訳文献や、オジャランのマルクス＝レーニン主義的なジェンダー史観などが話題となった。

山岡陽輝会員（慶應義塾大学）は、イスラーム主義組織「解放党」における「カリフ制国家」構想について、特に「憲法草案」（全191条）を材料に「カリフ」を頂点とする統治制度や司法制度、議会制度に焦点を当てつつ政治学的、法学的な議論を提示した。そのうえで、この構想ではイスラーム法の施行であるカリフ制と普遍概念である国家がどの程度両立されているのかについて分析した。質疑応答では、この構想があくまで純理論的であること、また世界に広める上での翻訳上の問題などについて闊達な議論が行われた。

（岡崎弘樹）

第四部会

山本健介会員（静岡県立大学）の報告では、東エルサレムのパレスチナ人住民が国家の保護を十分に得られないなかで、どのようにコロナ禍の感染拡大初期に対処したのかが明らかにされた。特にパレスチナ市民の有志によって立ち上げられた「エルサレム住民連合」の取り組みと、パレスチナ社会に根づいてきた市民組織の活動の関係について、重点的に議論が展開された。会場からは、タイトルに挙げられていた「生の序列化」が含意するものや第一次インティファダ時の人民委員会設立の経験との連続性、連帯のあり方の変容、コロナ禍における集団礼拝の位置づけや東エルサレムの事例が持つより広い文脈での研究上の意義について質問があった。

江崎智絵会員（防衛大学校）の報告では、ハマースの対外政策の重要性が指摘された後に、ガザ指導部を率いてきたイスマール・ハニーヤが政治局長に就任し、エジプトやシリアなどとの対外関係悪化をもたらした前政治局長のハーリド・ミシュアルの「負の遺産」の解消に取り組んだ過程が明らかにされた。特にハニーヤ自身が拠点としていたカタルに対するアラブ諸国の断交が与えた影響や、「ゼロ・プロブレム」と呼ぶことができる複数の国家との同時並行的な関係構築の様子について、分析が展開された。会場からはサウジアラビアとイランの関係改善がハマースの対外政策に与える影響、ハマースとファタハの和解にエジプトが果たす役割、和解進展の可能性に関して質問があった。

いずれの報告も、一次資料にもとづいた実証的な分析に立脚し、聴衆との活発な応答が行われた。

（鈴木啓之）

岡部友樹会員（大阪経済法科大学）は、レバノン内戦における宗派と暴力を、集団内暴力と集団間暴力との紛争に着目して分析した。分析では暴力イベントを時系列に配し、集団内暴力と集団間暴力の多寡をプロットして両者の関連性を議論したところに特徴があった。

児玉恵美会員（東京外国語大学）はレバノン人キリスト教徒への聞き取り調査を通じて、彼らの故郷をめぐる記憶の書き起こしによって、内戦時の強制移動を論じた。強制移動の体験を児玉会員に伝えようとする口調は文学的であると言え、叙情と郷愁を帯びた詩的な言葉が紡がれている様相が報告によって伝えられた。

李乗漢会員（神戸大学）は、1960年代のソ連の軍事的脅威がイスラエル政府首脳部にいかに受け止められ、同国の政治過程を通じて、いかに核兵器開発と保有政策の不透明性に繋がっているのかについて、外交政策論の立場からの研究報告を行った。イスラエルは核保有のあいまい政策を取っていること

で知られており、この政策の根拠に迫る報告であった。

中村友紀会員（筑波大学）はヨルダン川西岸地区における農業普及問題に、イスラエルの占領政策が及ぼす悪影響を計量経済学的手法で評価した研究を行った。中村会員は傾向スコアマッチング法を用いて、占領による道路建設や土地利用がパレスチナの農地を分断し、そのことによって効率的な農業生産が阻まれていることを因果推論した。

それぞれの報告に対して中東地域研究ならびにディシプリンの立場から、活発な質疑応答が行われ、報告者ならびにフロア参加者の当該分野における知見が深まったと言える。

（濱中新吾）

第五部会

近藤文哉会員（上智大学）は、エジプトの聖者廟やモスク周辺の祝祭と考えられてきたマウリド（聖者生誕祭）の祝い方に根本的な変容が起こりつつあるとする仮説をもって、COVID-19以降の国家のマウリドへの対応（モスク外での露店・仮設店舗の設営やタリーカによる様々な儀礼的行為の禁止等）を紹介し、それが公衆衛生的な懸念からの一時的対策ではないとして、国家の長期的な開発政策（2000年代以降のエジプト各地の聖者廟やモスクおよびその周辺の空間の再開発によるフェンス設置など）を指摘した。同時に、それに呼応するかのような、エジプト市民のマウリド経験の変容・多様化（「祝祭の場」の外で行われる祝い方の重視など）を挙げた。会場からはタリーカの対応や祝祭の場にかかわってきた住民の声などについて質問が出され、研究の深化に向けた課題が議論の中で明確にされた。

山口匠会員（東洋大学）は、「国王の一人勝ち」と言えるモロッコの権威主義体制が、国際機関や多国籍企業等が設定する新自由主義的転回の枠組みの中にあるゆえの危うさを抱えるとする政治経済学的な先行研究の指摘を評価する立場から整理した。すなわち国内では、アミール・アル＝ムウミニーンとしての宗教的権威に裏打ちされた「行政君主」たる国王が、1990年代より国内反対勢力の穏健な部分を体制内に取り込む分割統治の手法（2011年の「アラブ政変」後のイスラーム主義政党PJDを第一党とする連立政権の容認、その後の王党派政権復帰など）をとりつつ、テクノクラート主導の「強い国家、強い社会」新発展モデルを掲げて、西サハラを含む強権的開発に邁進する。対外的には、対西サハラ強硬策によってアルジェリアと対立しつつ、アメリカの譲歩を引き出し、イスラエルとの国交正常化に踏み出す。いずれも、国内格差や国際規範との矛盾など重要問題を先延ばしにし、深刻化させる、と。会場からは、国王を制約する枠組みの内容への一層の分析を求める質問などが出された。

村上拓哉会員（中東戦略研究所）は、湾岸地域の君主制諸国において、政治的な要職を王族内の複数の家系で分有する集団的な支配体制（マイケル・ハーブの「王朝君主制」）が、終焉しつつあるとの仮説に立って、近年の君主・皇太子の政治的な権限を拡大する動きを説明した。第一に、バーレーン、カタール、オマーンでは、王族内の合議ではなく、王位継承を父子間の垂直的継承とすることを憲法や法令で制度化する動きが進んでいる。第二に、サウジアラビアではサルマーン国王、ムハンマド皇太子を中心に政治資源が集中的に配分され、バーレーンではサルマーン皇太子の首相就任とともに、有力な王族が閣内から排除され、クウェートではサバーハ家内の分家であるジャービル家、サーリム家から交互に首長を輩出する慣習にかかわらず、近年はジャービル家が連続して首長を輩出し、首相職に首長の息子が就任した。このような君主・皇太子への権力集中の原因として、①レント配分から富の創出への経済課題の変化、②アラブの春を乗り切って体制への脅威が消失、③核家族的方向への家族観の変化、を指摘した。会場からは、各国の事例や原因などについて詳細な分析を求める質問などが出された。

米田優作会員（立命館大学）は、政治志向のムスリム同胞団との違いをアピールしながら政治から距離を置いて成長してきたエジプト最大規模のサラフィー主義組織であるダアワ・サラフィーヤ（DS）と、それを母体として2011年の「アラブの春」を契機に設立された政党であるヌール党（NP）の政治姿勢の動態（NP は、ムルシー大統領の第二共和政下で「イスラーム主義ブロック」を形成し、2012年憲法改正の際に条文に修正を加え、その後初代 NP 党首と DS 関係者との間での軋轢を経てワタン党が分化し、2013年政変とスーシー大統領の第三共和制成立以降、ムスリム同胞団などイスラーム主義組織弾圧の中で、エジプトの公的政治領域における唯一のイスラーム政党に）を、現党首らの著作や母体 DS 指導者の著作から分析すれば、社会的危機に際して、とりわけ同胞団の政治的失敗がイスラームのせいだとされないように、社会の安定を守る限りで政治に参加するという論理が見いだせるとした。会場からは、分析をより精緻なものとするを求める質問などが出され、今後の課題が明らかにされた

（岡野内正）

白谷望会員（愛知県立大学）の発表は、モロッコで10年ほど政権与党を務めてきたイスラーム主義政党、公正開発党が2021年国民議会選挙で大幅に議席を減らし、大敗を喫した理由を論じたものであった。選挙制度の変化を踏まえた上で、公正発展党内部の変化、政党間関係といった幅広い角度からの分析が提示された。質疑では、選挙制度の変化が選挙結果に与えた効果、王党派に対する社会の認識などが話題となった。

青木健太会員（中東調査会）の発表は、イランの対外政策における非国家主体の役割を論じたものであった。イラン体制によるアフガニスタン人のシリアへの動員を事例として、文献調査、聞き取り調査を行った結果から、民兵組織の起源や結成理念、リクルート・訓練の実態、さらにはアフガニスタン人の側の民兵組織への参加動機に関する報告が行われた。質疑では、民兵組織とイラン体制の関係や、動員されたアフガニスタン人の帰還後の状況などが話題となった。

中村覚会員（神戸大学）の発表は、ムハンマド・ビン・アブドゥルワッハブの書簡、小論集に基づいたワッハーブ主義論の再検討を行ったものであった。詳細な先行研究検討から、既存のワッハーブ主義研究がムハンマド・ビン・アブドゥルワッハーブの著作を十分に解読できていないという現状を明らかにした上で、タウヒード観、タクフィール観、ジハード観に関する原典解析とイスラーム中道派の議論に照らした評価が提示された。質疑ではジハードに関する原典での議論、先行研究が抱える課題などが話題となった。
（渡邊駿）

第六部会

竹田敏之会員（立命館大学）報告「アラビア語研究の新分野としての文法源学」は、言葉の正しさや正誤判断の根拠を論じる学問領域「文法源学（ウスール・ナフウ）」の枠組みとこれまでの展開を紹介した。カイロ・アラビア語アカデミーにおける道具名詞の語形パターンの承認過程を事例として示し、アラビア語研究の中心が湾岸諸国に推移しつつある現況も含め情報・示唆に富む内容を明瞭に論じた。「文法源学」は従来あまり取り上げられなかったが、正則アラビア語を考えるうえで枢要をなす分野であることが改めて示され、言葉の「正しさ」を確定していく過程に関心が集まった。

榮谷温子会員（慶應義塾大学）報告「総称指示との関係から見たアラビア語の「一般化（タアミーム）」」は、アラビア語文法における総称指示の用法（全ての要素の包含、種の特徴の集合）と一般化（一般を表す、全ての否定）を整理し、限定・非限定の別も踏まえたうえで多元的にそれぞれの役割の分析を試みた。特に、報告中の「特定性 takḥṣīṣ」について、文例の出典及びその限定性の範囲・程度に関し質疑が行われた。

村上武則会員（東京外国語大学）報告「クルド語翻訳と古典の「クルド化」」は、クルド語クルマンジー方言への翻訳作品の出版・刊行が2010年以降活発化している現況を、対象を古典の翻訳に限定した上で分類・分析したものである。本報告は、作品選択、翻訳の技法、訳語、訳者の解説も含めたクルマンジー語翻訳作品の内容検討により、翻訳出版の活性化とクルド人ナショナリズムの高揚との関連性を指摘した。クルド語の多様性、またスウェ

ーデンを始めとする欧州での翻訳刊行やネットでの発表が多い書評など、出版をめぐる現状についても活発な質疑応答がなされた。

(柳谷あゆみ)

濱田聖子会員（東京大学）の発表主題は、アッバース朝期の文豪ジャーヒズ（868年没）の諸作品に見られる「真面目さと冗談」の技法であった。先行研究では読者の気分転換のためにこの二つが交互に繰り返されると理解されてきたが、濱田会員は、冗談話に真面目な意味をもたせる事例や真面目さと冗談が不可分に結びつく事例などを示し、「真面目さと冗談」の使用法は実際には多様であり、幅広い読者層が想定されていることを明らかにした。この発表に対しては、同性愛に対するジャーヒズ自身の立場や責任回避のための冗談などについて質問があった。

ウェルズ桜会員（立命館大学）は、紀行文学としての側面がとかく強調されがちであったタフターウィー（1873年没）の『黄金の精錬』には、統治者への助言を目的とする鏡文学の特徴も見出されることを示した。本発表によれば、タフターウィーは、フランスの「文明」の基盤にある「正義と公正」はイスラーム圏の思想文化にも通底するものであり、西洋諸国に学ぶことでイスラーム諸国は現状の「無知蒙昧」から脱却できる、と訴えたのである。発表後には *liberté* の解釈と訳語、テキストの改訂などについて質疑がなされた。

(菊地達也)

第七部会

第七部会では、アラブ地域と日本の関係交流史を扱う4本の報告があった。

黒田賢治会員（国立民族学博物館）は、軍部との繋がりが前提となってきた「アジア主義研究」に新たな視覚を投じるべく、民間の旅行者として中東・イスラーム圏を訪れた中島裁之に注目した。彼の旅程とともにメッカ訪問にまつわる記録を検討した結果、中島がメッカ滞在時に高熱を患っており、巡礼行為や詳細な観察ができなかった可能性が示された。そして、中島のような旅行者の存在は、アジア主義における民間の役割を再考する端緒となると指摘された。質疑では、彼の旅の資金源や目的、直面した困難、メッカに滞在することの意義などが問われた。

ヘバタッター・オマル会員（名古屋大学）は、エジプトと日本の相互のジェンダー表象（とくに女性表象）を、諸分野の研究と映画やニュース等のメディアという二つの観点から概観した。エジプトのアラビア語による日本研究ではジェンダーの視点が不足しがちである一方、メディアの表象においてはステレオタイプ化された表現が目立つこと、日本においては、1990年代

以降、中東・イスラームを扱うジェンダー研究が盛んになりつつあるものの、その表象にまつわる歴史的背景や民間文化と民間信仰を扱った研究、および理論的考察が不足していることが指摘された。報告後の質疑では、研究相互間の翻訳や交流のあり方が議論された。

ニコラス・マンジェラーディ会員（ウィリアムズ・カレッジ）は、1960年代のエジプト大衆文化における日本ブームの背景を考察した。1962年のエジプト航空日本便就航の前後に、日本からの映画撮影隊やダンサーがエジプトに訪問したり、エジプトで日本映画の上映が話題になったりしたこと、政治的に「エジプトの遺産」が重要なアイコンとなった1950年代から60年代にかけて、日本で古代エジプトブームやエジプト綿が注目されたことなど、政治・経済的な関係性の強まりや、マスメディアの積極的な関与がこの時期に起きていたことが指摘された。質疑では、その後の両国関係の変容やメディア表象の変化が話題になった。

アラア・シャルカーウィー会員（カイロ大学）の報告は、1956年7月から12月までのスエズ問題に関する日本の言説について、主要紙（朝日新聞、毎日新聞、読売新聞）の記事や社説をもとに検討するものであった。当時の日本では、経済的なメリットや、戦争勃発の懸念、民族解放運動に対する共感など、多岐にわたる理由から、エジプトを支援しようとする言説が強まったという。またスエズ危機以前からのエジプト・日本間相互の影響関係が、危機という状況の中でより強固になった可能性も指摘された。質疑では、日本におけるエジプト観の生成に関連して、ナセルによる『革命の哲学』（1956年）の受容などが話題に上った。

（後藤絵美）

【第39回年次大会を終えて】

日本中東学会第39回年次大会は、2023年5月13日（土）と14日（日）に筑波大学地中海・北アフリカ研究センターが主催となり、つくば国際会議場と筑波大学で開催されました。新型コロナウイルス感染症も収まりつつある中、コロナ禍による大学の施設利用の規制がなかなか解けない状況ではありましたが、対面方式を中心とした大会の開催を計画しました。最終的に、大会開催前の5月8日にコロナの感染症法上の分類が2類相当から5類に引き下げられたこともあり、公開講演会と総会は、ハイフレックス方式（対面・オンライン併用）、個人研究発表・企画セッションは、対面方式で実施しました。また、コロナ禍で自粛していた懇親会も実施しました。感染予防対策をとりつつ開催しましたが、大会中の感染もなかったようで、皆様が対面で参加できる場を提供することができました。コロナ明けで参加してくださった皆様に、改めて感謝申し上げます。

大会一日目の公開講演会では、第一次石油危機から50年を迎える現在、中東と日本の過去を振り返りつつ、中東地域の新たな魅力やポテンシャル、今後の中東研究の展開を考える機会としました。近藤重人氏（日本エネルギー経済研究所）、磯田博子氏（筑波大学）、岡島敬一氏（筑波大学）より、エネルギー安全保障と気候変動、乾燥地食薬成分の機能性解析、再生可能エネルギー由来の水素製造とサプライチェーンについて講話いただき、塩尻和子氏（筑波大学／アラブ調査室）、長沢栄治氏（東京大学）からのコメントを踏まえ、食薬資源や水素に着目した中東地域のポテンシャルや文理融合による中東研究の重要性を提起しました。今回の講演会を通して、一般の参加者には、食薬資源や再生エネルギーの観点から中東地域の理解が深まるとともに、学会員には、中東地域研究に新たなヒントが得られることを念頭におきました。本講演会に対面では94名の参加があり、オンラインには関係者を含め116名の登録がありました。

また、大会二日目の研究発表は、企画セッションが1件、個人研究発表が45件行われ、189名の参加がありました。今大会の研究発表は対面のみで行い、また、懇親会も開催しましたが、会員の皆様の間で久しぶりに顔を見合わせての話に花が咲き、再会を祝う場となりました。

新型コロナ発生からこの3年間、中東研究の実施、特にフィールドワークは困難であったかと存じます。対面中心の年次大会の再開を踏まえ、今後有意義な研究が展開されることを切に願います。末筆ながら、司会をご担当くださった会員の皆様、事務局・実行委員会と学生アルバイトの皆様には、準備段階から大会開催にご尽力をいただきました。また、つくば観光コンベンション協会を通して、つくば市に開催支援をいただきました。ご協力くださった皆様方に、実行委員会を代表して、心より御礼申し上げます。

（柏木健一 大会実行委員長）

【大会決算】

日本中東学会第39回年次大会決算案

収入の部		支出の部	
大会開催費（学会本会計より）	400,000	筑波大学会場費	241,630
大会参加費（186名）	279,000	つくば国際会議場費	223,500
懇親会費（91名）	530,000	ホテル日航会場費	72,600
会場費補助費（学会本会計より）	465,130	つくば国際会議場貸出備品費	46,980
つくば市開催支援補助金	195,000	大会ポータルサイト作成費	179,000
利息	1	Zoom ウェビナー契約費	14,108
		看板作成費	46,000
		講演謝金	40,000
		ベビーシッター派遣経費	60,785
		学生アルバイト経費	122,500
		スタッフ大会当日昼食費	27,000
		コロナ感染症対策消耗品費	8,575
		懇親会費	623,400
		振込手数料	13,530
収入合計	1,869,131	支出合計	1,719,608
		学会本会計への返金額	149,523

（柏木健一 大会実行委員長）

『日本中東学会年報（AJAMES）』編集委員会報告

1. 今年度発行号について

39-1号を7月末に発行いたしました。会員のみなさまのお手もとに届いているかと存じます。また、39-2号の投稿論文審査が終了し、現在その編集作業を行っています。

2. 来年度発行号について

40-1号の投稿締め切りは2023年12月1日（金）です。特集を含め、論文、研究ノート、書評論文、資料紹介、書評など、さまざまなジャンルがあります。締め切りまでまだ約3ヶ月ありますので、みなさんの研究成果をぜひ御投稿ください。とくに欧文原稿は歓迎いたします。なお、投稿規程・原稿執筆要領の最新版は、AJAMES最新号のほか、学会サイトにも掲載されておりますので、それらを御参照ください。

3. 欧文特集のお願い

AJAMES では、欧文（英語・フランス語等）での特集の企画を募集しております。企画をお持ちの方は、直接ご投稿いただくか、編集長まで御相談ください。どうぞよろしくお願いいたします。

4. 博士論文要旨（英文）

会員による中東関連の博士論文要旨（英文）も掲載しています。こちらはとくに締め切りを設けておりませんので、最近博士論文を提出された会員の方は、随時、御投稿ください。また、お近くに中東関連の博士論文を提出された方がいらっしゃれば、ぜひ投稿を呼びかけてください。

5. 2023年度編集委員会の体制

本年度の編集委員会は以下のような体制になりました（敬称略）。前年度からの変更としては、横田貴之氏が退任し、竹村和朗氏、Keivan ABDOLY 氏、Mohammed MOUSSA 氏が新たに就任しました。

編集委員長：福田義昭

副編集委員長：錦田愛子、菊地達也

編集委員：石黒大岳、今井宏平、江崎智絵、柏木健一、齋藤剛、佐々木紳、竹村和朗、山崎和美、吉岡明子、吉村武典

外国人編集委員：Keivan ABDOLY、Dale F. EICKELMAN、R. Stephen HUMPHREYS、KIM Joong-Kwan、Mohammed MOUSSA、Abdul Karim RAFAQ、SONG Kyung-Keun

本誌に関するお問い合わせ先、原稿投稿先は以下のとおりです。

〒562-8678 大阪府箕面市船場東3-5-10

大阪大学 箕面キャンパス 外国学研究講義棟841号室 福田義昭研究室気付

『日本中東学会年報』編集委員会

E-mail: ajames-editor@james1985.org

（福田義昭 AJAMES 編集委員長）

寄贈図書

【単行本】

- 望月葵『グローバル課題としての難民再定住——異国にわたったシリア難民の帰属と生存基盤から考える』ナカニシヤ出版、2023年.
- 森壮也編『中東の中の「障害と開発」』アジア経済研究所、2023年.

【逐次刊行物・ジャーナル・その他】

- 『季刊アラブ』No.183、日本アラブ協会、2023年4月.
- 『季刊アラブ』No.184、日本アラブ協会、2023年7月.
- Awraq, No.21, Biblioteca Islámica de la AECID, 2023.

(小澤一郎 事務局長)

会員の異動

【新規会員】

阿部 達也
内山 智絵
奚 湘源
佐々木 陽子
佐藤 佳奈
佐藤 有香
志賀 清弥
杉本 裕樹
樋口 直樹
廣田 元
松本 和希
村山 春奈
ワイエブ 壮飛杏
Alolayan Kltham
ZAKERI GHODRATOLLAH
MA YAQIN
Sarieddine Toufic

【所属先変更】

岩本 佳子	京都大学文学部西南アジア史学専修
上野 祥	創価大学学士課程教育機構総合学習支援センター
宇田川 彩	東京理科大学高等教養教育院葛飾キャンパス教養部
澤 裕章	東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻 博士後期課程
澁谷 朋樹	新潟産業大学経済学部
大工原 桂	SMBC Bank International plc
辻田 俊哉	大阪大学 CO デザインセンター
中川 恵	羽衣国際大学現代社会学部／武蔵野大学国際総合 研究所
沼田 彩誉子	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
橋爪 烈	関西大学文学部総合人文学科世界史専修
早川 英明	東京理科大学経営学部国際デザイン経営学科
樋口 直樹	同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究 科博士後期課程
森田 豊子	横浜市立大学国際教養学部
山下 瑤子	横浜国立大学

(小澤一郎 事務局長)

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため、学会からのお知らせなどをお届けすることができないでおります。連絡先をご存じの方は、学会事務局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただければ幸いです。

近藤 百世 後藤 信介 住吉 大樹
ターリク フセイン ハカミー 西川 優花 西舘 康平
ババアリ 梓晴 林田 花枝 藤井 菜津子 三橋 咲歩
ヤズィード ナーセル 山下 瑤子 横田 吉昭
Mohamad Haidar Reda

(小澤一郎 事務局長)

事務局より

開催からかなり時間がたってしまいましたが、5月の筑波大学における日本中東学会第39回年次大会も無事終了いたしました。今回は1日目の公開講演会・総会が対面・Zoom併用のハイフレックス形式、2日目の研究発表が対面形式のみと、昨年度に増してコロナ禍以前の日常への回帰を感じさせる大会となりました。また、ハイフレックス形式での総会は（おそらく）日本中東学会史上初でしたが、実行委員の皆様のご尽力もあり、大過なく挙行することができました。開催校である筑波大学と実行委員をはじめとする関係者の皆様、そして開催に当たってご支援をいただいたつくば市にはこの場を借りて改めて御礼申し上げます。

（小澤一郎 事務局長）

日本中東学会ニューズレター 第171号

発行日 2023年9月15日

発行所 日本中東学会事務局

日本中東学会事務局

〒603-8577

京都府京都市北区等持院北町56-1

立命館大学文学部 小澤一郎研究室内

E-mail: james@james1985.org

<https://www.james1985.org/>

郵便振替口座:00140-0-161096

(日本中東学会)

ゆうちょ銀行口座:〇一九店(当)0161096

(ニホンチュウトウガクカイ)